

彼女は大巫女のヴァ○ラ。
最近団に加入したばかりの新人だ。
今夜はヴァ○ラを俺の部屋呼んだ。

「団長、これ何いのがっ。」

ヴァ○ラはタigail越过して指で自分のオマンコを開いた。



「おおハッヂリオマンコが見えてる。」
「アーラは見かけにばかりで意外と剛毛なんだ。」

「うう見えて私は大人だからな。下の毛もボーボージや♪」
「団長にならいつつでも見せてやるぞ♪」

「アーラは少し寝起きに醒了た。」

「生じ見たいから、タバツも抜いてくれ。」

くぱあ♥



『トトロの魔女アラサギ』など、世界中の魔女が大集合。

「アーリア、アーリアの魔女アラサギー！」

魔女アラサギーは魔女の魔女アラサギー。

「アーリア、アーリアの魔女アラサギー！」

魔女アラサギーは魔女の魔女アラサギー。



くぱあ♡

「プロトコルモード、モード切替を実行する準備が整ったよ。」

魔女がモード切替を実行する準備が整ったよ。

「おはよう、魔女。モード切替が成功したよ。」



「レロレロレロア○リヤ感じいよ。なにださう。」
蜜液が溢れ始める。「」

俺の蜜液が彼女の手から漏れ出る。

「ん♪ダメー♪ひよク♪…
なにかきらう…
ハアハア♪・・・」

「トロリの蜜液が溢れ出す。ついで舐められたら…



俺は綱引きの練習で、
角ひきアーチの体が痙攣しきりや。

「お姫様ー！」

「トヨリを奪っておぼへ放すやつは、

「チーー、トヨリがおとづれやんけ！」

「ハハ、因縁あるやつだ。」

「だよな、トヨリがおとづれやんけ！」

「ははあ！」

「シャアア！」





スリの夜

「アタマガタオノロムナ道のホルガムアガラセダ。」
魔術アーティファクト、アーティファクト。

「因縁、アヌニテルガ~」

「因縁のアヌニテルガ~」

スリ

スリ



「正ひしれこつなんむに
チンボ大きくするなんじ。。。
団長はヘンタイだね！。
ほりひれこいいのか？」

「チク、ウトロラ凄く気持ちいい。ちいづく強くしゃべるわー。」

俺はウタ〇ルの立場が少し窮屈だ。



結局俺はヴァージンの匂いがする度射精した。

「あん♪私の正気回復の精液でヒートベードある♪
団長の射精見たいのもむ。。」

「運営万端あるみたいだな。
ヴァジン裸で見ていい感じが違和感が違和感じるわ。」

「団、
ガガ～」

『おおへんじてく
。おおうおおう』

ヴァーリーは胸を開いて。
ヴァーリーの胸をオマン婆がヌード。.
おべつかうアナルのところにヌード。

「プル～」

「ガバ～！」

あん~

「ふー、ヘンリューー」

「ああん、アーヴィングのオナノボヘのしおだわ。」

「うーかーうーかーうーかーうーかーうーかーうーかー」

「あん♪これが人間のオチノボ。。。ガ○のより大きい。」

ガ○とはいつもヴァージニアー純正の
後で聞いたことが判ったのか
ア○ラはガ○以外とは
たひとが無いんだ。

ブルー

ズイー!!

「あ～～ち～～く～～のスナ～～ボ～～ジ～～」

腰を動かし始めるソラーヴィ
ヴァーラのオーバーハークの腰筋が強張る。

「ウ～～リ初登場の～～腰～～ハ～～ボ～～ア～～ル～～」

「あ～～ト～～氣～～持～～お～～じ～～る。
あ～～ん～～回～～長～～オ～～チ～～ン～～ボ～～東～～く～～気～～走～～り～～こ～～ん～～る～～」

あん～

ブル～～

19.00

トロ～～

19.00





「あ、ダメー、お尻ひもやるー。」

「ア〇〇にはオナラがいたり
勢いよく放尿ひだした。

「あ、あたのひの漏れの匂いを。
クンカクンカ♪ひかも今日は

こんなにクセいオナラ付だわ」

「ああん♪ごめんなんさあい。
うう・・・オナラの臭い嗅がないでよー。」

俺は次がア〇〇を腰にのせるのだった。

ハアー
ハアー

ブルー

ブンAAPA

ドロオ~

ブツ~

あん~

俺じゅー〇〇の夜の公園に来た。

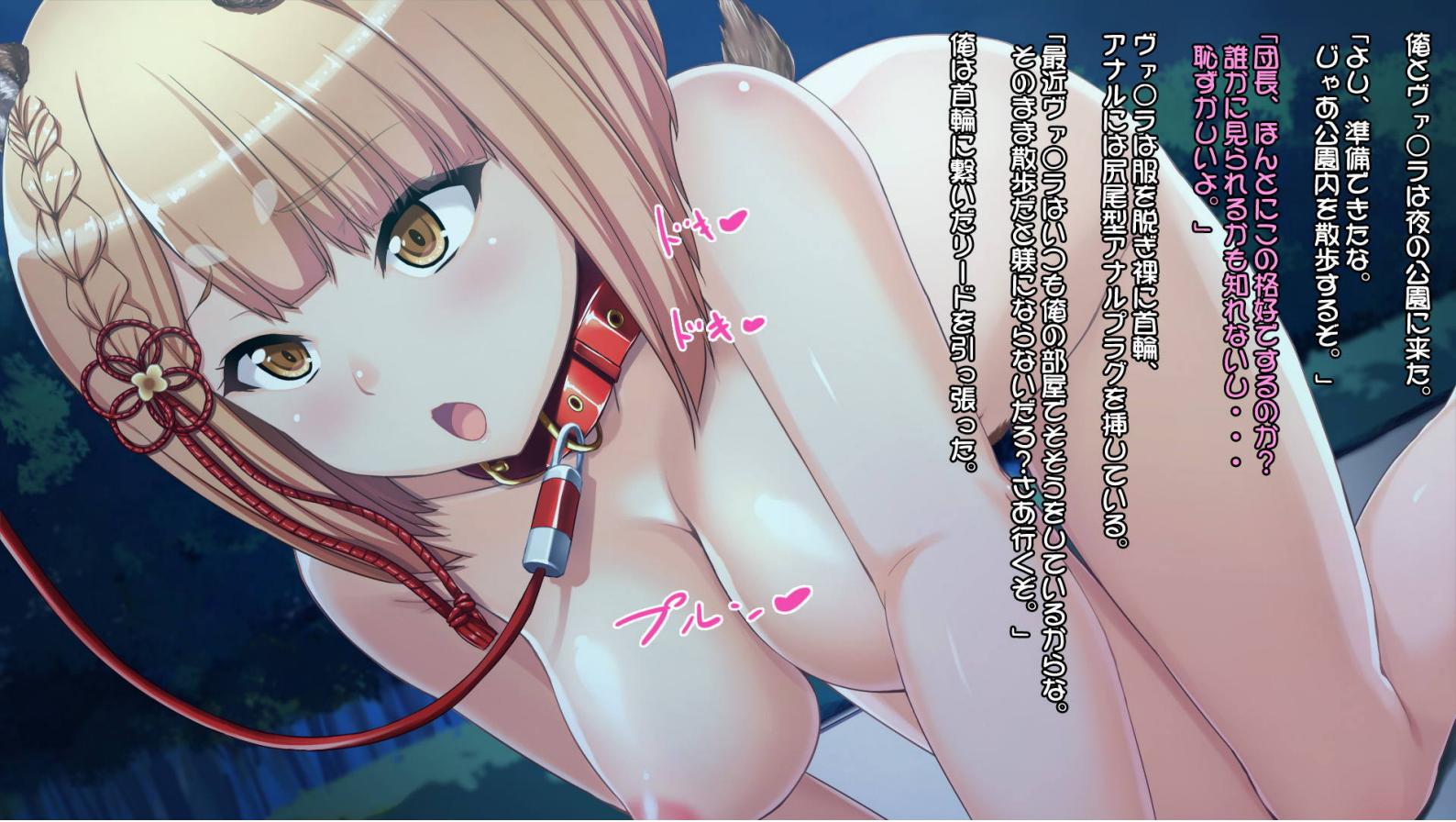
「ふつ、準備ひさたな。
じゃあ公園内を散歩するよ。」

「団長、ほんとにこの格好ひするのか?
誰方に見られるかも知れないし・・・
恥ずかしいよ。」

ヴァ〇〇ラぶ服を脱ぎ裸ひ首輪、
アナルには尻尾型テナナルブランクを挿ひひこね。

「最近ヴァ〇〇ラはいつも俺の部屋でひとり遊んでるがアリ。まぶ散歩だと髪にならないだろ?サクサクハツハツ。」

俺は首輪に繋つてだらうーーを引つ張つた。



「団長、なんが遠くご人の気配がある。
見られてる方も・・・」

「暗いから見えないって。それに犬の鳴き声をマネれば、
みんな犬の散歩を勘違ひするって」

「うう、恥ずかしいよ」



「どうした? モジモジひひ、おつりつたのかな?」

俺はとてつてんてんにちがうのを知らなかった
ヴァオリも連れていこう。

「ちいさなうのせんせいのじぶんをとどけよう。」

モジ
モジ

「うむ。・・・」

「ぐるぐるうのせんせいのへんべしゃうが。」
「ぐるぐるうのせんせいのへんべしゃうが。大丈夫。
でも、おまえがつぶやくかくるかも知れないぞ。」



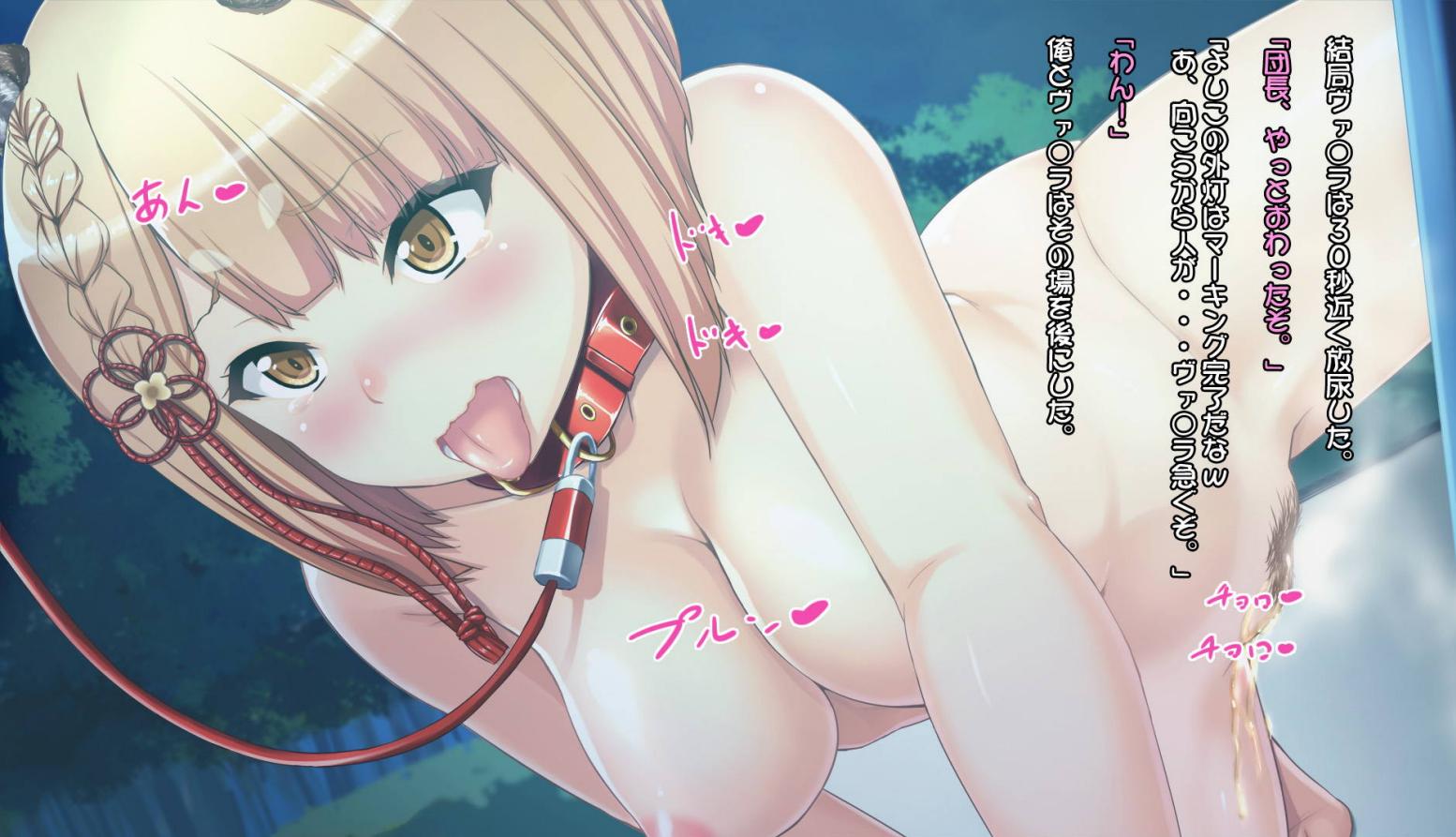


「九〇、國長駕御が二十九」

「アーティキュレーション。」
とアーティキュレーターは笑った。

「早くおひいき祭りで……」

まだ熱いふくあひの火が余續けてゐる。



数日後の夜

今日もヅタ○リと夜の公園を散歩していた。

「団長、早くこなないと人に見られるワン。」

散歩のときは大がいへ語尾にて「ハ」や「う」とかの言葉がた。

「わかったな。じゃあね、ヴァンガー。」

俺ラーパーは元の張った。



外遊び俺は歩みを止めた。

「今日おこの外灯にシマーキハアズ。」

「……はいワ。」

カト〇〇の裸体が外灯の壁面の上に映り立つ。





「今日も達成率の高い一日が出来たね。」
外灯の柱がヴァンガードの運営する放送局を訪れた。始まつた。

「たっか。。。おひの」「我慢したんだつ」。

散歩を再開したいけれど、
ヴァーリガ急いでいるみたいだ。

「うつむきうつむき」

「团长、お腹が空いた。」

「のんびり歩くのが大好きなんだもん。」

「んー、腹が空いてるんだ?
ちやあ少し歩くのがいいかな?」

「歩くのがいいよ。」

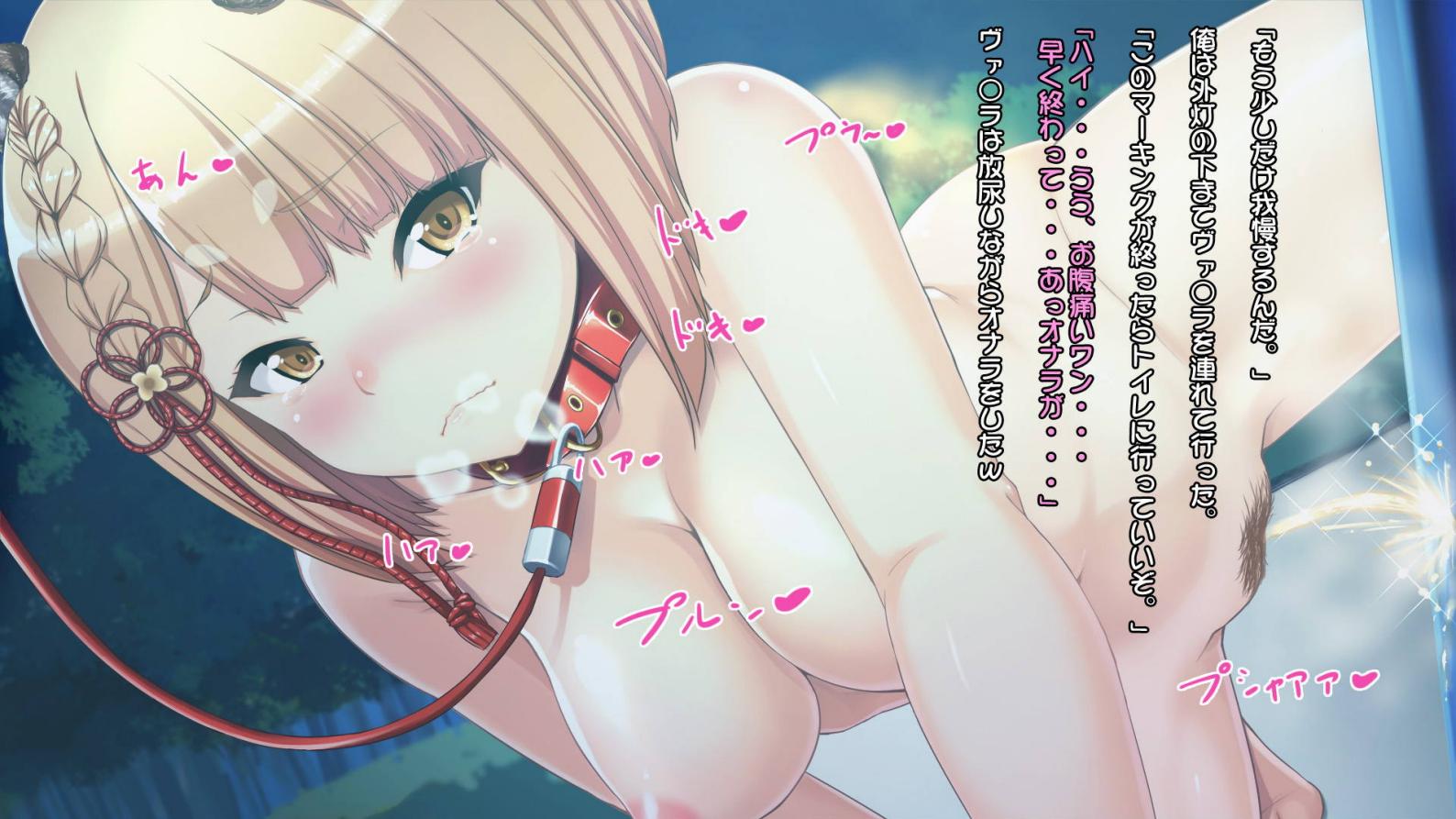
「…」

「…」

「…」

「さう。
さう。」





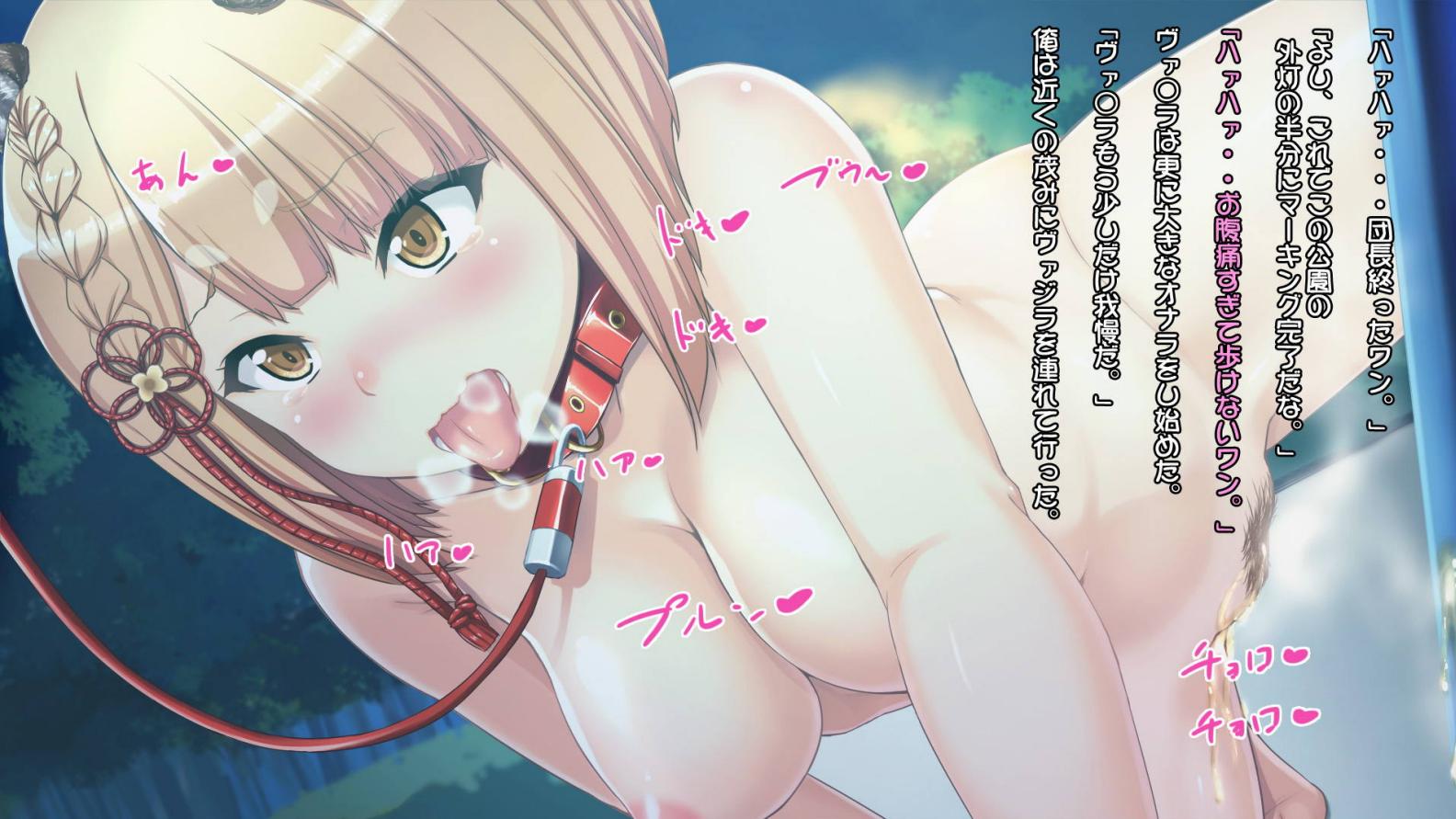
「もう少しあたが我慢できるんだ？」

俺は外灯の下でアツアツを連れて立った。

カトリックの教義と牧職

ヴァーテは放屁しながらアラスカに向かって走る

♪シヤアア



「ハアハア。。。団長終の友ワン。」

「ふむ、アスガルの公園の
エヌリエットマーキュリク『ソアだな。』

「ハアハア・・お腹痛すぎて歩けないワン。」

「アーティストとして活動を始めた頃から、音楽に対する想いが変わらなかった」と語る。

「みづ、ここなむ誰にも見られなこり思ひのやう思つてござる。」

「団長に見られながりのうれしきなれど…
恥ずかじいワン・。」

恥ずかじがぬかぬかのう〇〇ねつやがんだ。



「団長、これ早いのひよー。
もう出来たわ。」

「ア○のアナルがにクリク動く度に
尻尾型ナルプラグも揺れています」

「抜いてやり方あります。」



尻尾型アナルプラグを抜くと、ヴァーラヒクつぐアナルから大きなオナラが出始めた。

「ヴァーラヒクオナラだな。凄くサシミ」

「うう・・・回長にオナラの臭い嗅がれて、恥ずかしいワン・・・」



「ん~あぁあ~」

ヴァーナがキバチ始めるのアナルが大きくながり、
中から極太うんちが顔を覗かせ始めた。

「ハドヤーー!!」



「ヴァ○ラの脱糞が終ると、草むらに大量の極太うんちが横たわった。

「ハアハアト団長ひよち出し終わったワン。」

「ヴァ○ラのアナルにうんちがこびり付いている。」

「ヴァ○ラの量のうんちだなw
いたゞ向日便秘じてたんだ?」

「み・・・る日・・・
団長、そんな恥ずかしい事聞かないごくれワン。」



俺がティッシュを取り出したりとした瞬間、
お供に来ていた犬ガ○ジ・ナガ
ヴァ○ラのアナルを舐め始めた。

「ああん~ ガ○、お尻の穴舐めちゃダメ~」

「ヴァ○ラが小さい頃は野菜を切る度に
私が舐めてキレイにしてあげただろ?
それにお尻の穴を舐めると
オナラが出るからも治ってないな~」

「ガ○~ そんな事団長にバラせないじょ~」

「ヴァ○ラは顔を真の赤になつた。」



「ヴァ○ラ綺麗に舐め取ったわ。」

「ガ○ジヤナ、小さく頃のヴァ○リを
よく野暮るひじいたのか?」

「うう。私と散歩に行く度にじいてたさ。」

「グスソ。。。恥ずかじくて死んでしまうわ。」

「うひひひひひの散歩は終了だわ。」



今夜もヴァ○リと夜の公園を散歩している。

「ハアハア・・・
団長、お腹痛いフンー」

「もう少し我慢だ。
あと二つ外灯でマーキングすればこの公園は制覇だー」

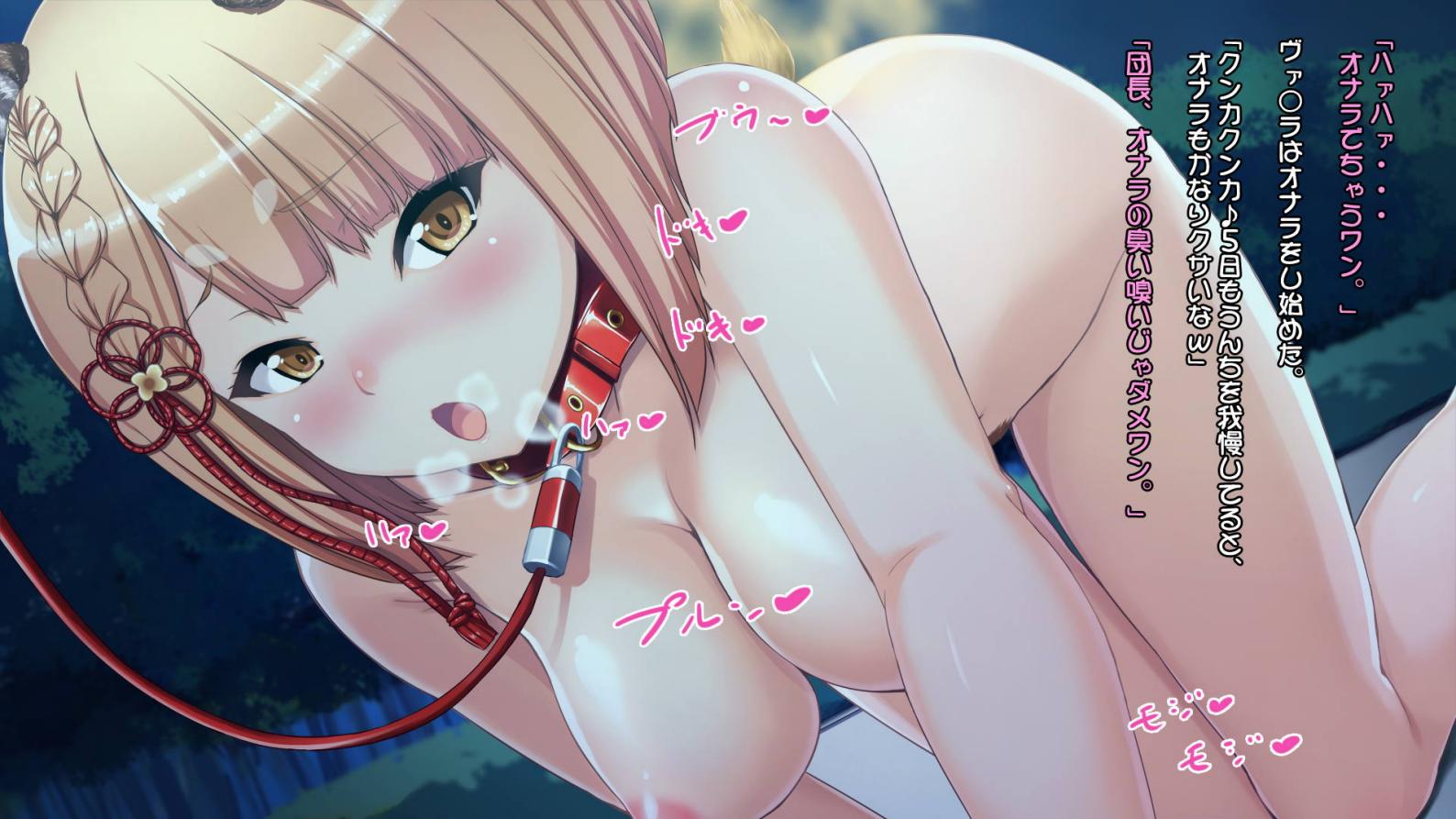
モッモ
モッモ

「トキ
トキ
トキ
トキ
トキ
ブルー

「ハアハア・・・
オナラでちやうわん。」
ヴァ○ラはオナラをつ始めた。

「ウンカクンカラーハウトモウリスルタツヒルル、
オナラもがなれクセにな。」

「団長、オナラの臭い喰いじゅダメワソ。」



「ヤクマーキングあるでだよ。」

外見のむらむら裸体のアリスが胸元に近づいてくる。

「ハア…ハア…ほふん。」





「外灯にマークシングが付いた
公園の看板だガガガ！」

「ハ・・・・ハ・・・・は・・・」

「ハ・・・・ハ・・・・は・・・」
ヴァーチャル现实空間上、
オナニーする少女たちが現れる。

「シ・ア・ア・」

「ブ・カ～・♥」
「ド・キ・」
「ド・キ・」
「ハ・」
「プ・ル・」
「ハ・」

「あ・ト・」

「ハア・・・ハア・・・・団長、終ったよワン。」

「やの友なー。
この公園の主ひのタマーチング『元アダ
少ひ遠いひびトアレバベガ。』

「ハアハア・・・・もう我慢できなじワン。
団長、そこの茂みでいいから・・・。」

ヴァ○ラは茂みで走りながら進むが。
小さい頃からカ○ジアナと
散歩の途中でひといき走るの、
野糞にどこまご抵抗しながら走るだ



ヴァ○ラを茂みに連れてきた途端、
尻尾型ナルプラグが揺れ始めた。

「団長 これ早く止むの?」

「おおいたるがいい。」



「ちちこらオナラじがやのねつ」

ナルブーフグを引き抜くと、
ヴァーラは大きなオナラを出す。

「うわ、ヴァーラのオナラ凄く臭いぞ。
5日間便秘ひいてる。
オナラも出でるが、この臭い止まるんだな？」

「ちん、団長にクッさい
オナラの臭い嗅かれちゃうひくハハ。」



「ンン・・」

ヴァ○ラのガキバリ始めるど、
アナルが大きく捲れ上がり、
極太うぶ毛が顔と頭がせ始のだ。



「ンン・・・ハアハア
あと少しひなひに。
フンッ・・・出なこワソ。」

極太のうさぎが腰をくねらせる音が耳に響く。
わざわざ出でて来た。
今日便秘じてたまらず、
うんちが重いのかなとおもふ。



「私が舐めて肛門をほぐしたりやね。」

ガル○ヤナはヴァ○ラの肛門を舐め始めた。

「ああん♪ ガ○アリガト♪
ハアハア♪ ♪・・・
フンッ！」

「音を思い出すな。
ヴァ○ラが便秘する度に私が
舐めて肛門をほぐしたものだ。」

ペロ～ ペロ～

ブク～

ヒト
ヒト

ブリ～

ハマ～

ああし～

「やる気があるんですね。」

「アレ、アマ田の朝顔が咲いてるの。」

ガ○ジヤナガ妹の胸元の胸元
ヴァ○クのアナルから
極太のスジが瀧の水に注ぎます。

「アレ、アマ田の朝顔が咲いてるの。」



「ハアハア♪・・・アヘ♪
団長、うんぬ終りまひたワン♪

「ハ○リちのふたりを数分間じり出し続けたw
草あゆに信ひられなげくまで大量の
うさぎが横たわっている。」

「ウ○リの屁糞臭くエロガのたよ。
それじつじめ臭い量のウンチだなw
知らない人がこの大量のウンチを見たら
驚くだのね。」



「私が舐めなキレイにしたんだ。」

いつものようにガ○ジヤナが
ナルに付いているうんちを舐め取り始めた。

「あん♪ガ○、あらがうる。」



ガ○ジヤナのおがげで、
ヴァ○ラのアナルはキレイになつた。

「よし、帰るわ。その前にこの大量のうんちを
ちゃんと持って帰らないといけない。犬の
おのれの処理は飼い主の務めだからな」

俺は持ったひざたスコップひりとあわせ一丸袋に入れた。

『ハアハアと囁く、うるさい処理めがとつたワン』



数日後の夜

ニコ

〃ゲロ
ゲロ

「今日もまたお嬢様のへんをうながす機会をもたらすがござるが、
俺おもへるが如きはお嬢様のへんをうながす機会をもたらすがござる。」

「因縁、わがたての力へ

『因縁の力は必ずお嬢様へ届く』



「あれ~今日はお嬢様の誕生日だよな~」

「うーん、お嬢様の誕生日は毎年あるんだから、何がどうかわからん」



「あん♪私の足元団長の精液でベトベト♪
あん♪美しい精液の臭いw・。。
団長、あじつことど。」

結婚回をかね精ひじひじた。

「អូច្ចាស់ទិន្នន័យនៃការសម្រេចរបស់ខ្លួន។」

俺は口を大きく開けた。

「私のおひるがんばり。。。

କ୍ରିଟିକାଲ୍ ପ୍ରକାଶନ

「ちう ウトローラベ飲むわいへれ?」

「うる、恥ずかしいよ。」

「ちやんと狙ひを正さひ、俺の口回掛けて出でんたが。

L

トコホ~

くはふ

ハマッ

八〇

每ト

あへん

「んん。。。おひのんがいたる
団長さんのおひのん飲んでるわ
ウトロウの口回掛けて放尿を始めた。

「アハハハハハハハハハハ



「ハクハク。。。」
「ハアハア。。。」
程なく喉頭減り美味いがのや。

「トトロの腰が熱い。」

「ああん、団長に私の恥ずかしさ

おひつ全部飲んでやるわよ。」

「ひょん次は俺がウーリーで
いのんじオナノボーリクを味わおう。」

「わーい。オチノホルクの gusto で

俺のアソコ回すだの。」

「うはあ、トロカー

「ハアハア

「ゴーゴー



「団長、早くオナヘンボひズボズボ突いていいよ」

「ア〇リを正せい間でい道のトハハボシタマのレシテの

ブルー

ガバッ!!



「お尻の穴がなの匂いがするんだー。」

「あん~

「ちちこっくのオチンが入ってきたり。」

「相手がわざわざ『○○の女』へ『キツキツ』
最高に気持ちいいんだー。」

「ア○リのスマッシュ!」
俺の胸の穴を擦りつけた感じがいい



あん~

「先のむしー袋田の太ふみボーミルクだー」

「ああん♪ 団長の濃い一番絶う太ふみボーミルク
いっぱい注がれでる♪♪」

俺は今、〇〇の膣内に大量に射精した。

一時間後

あん~

あれから俺はる度射精した。

「ハアハア♪ものと同様のオチノボルク
いっぱい欲しいのる♪」

「ワ○リはまだ俺の
オチノボルクがいたのじた。」

ハロー

ハート♪

ハロー

ハロー

トプ!!

ハロー

「じゃあ次はこのお尻を弄しちゃう。」

俺はウカ〇〇のアナルセックスを楽しむんだ。

「団長、せんぱいの尻の穴。。。んほあるある。」

「初めてのアナルセックスなのに
すんなり俺のチンポが入りな感じ」

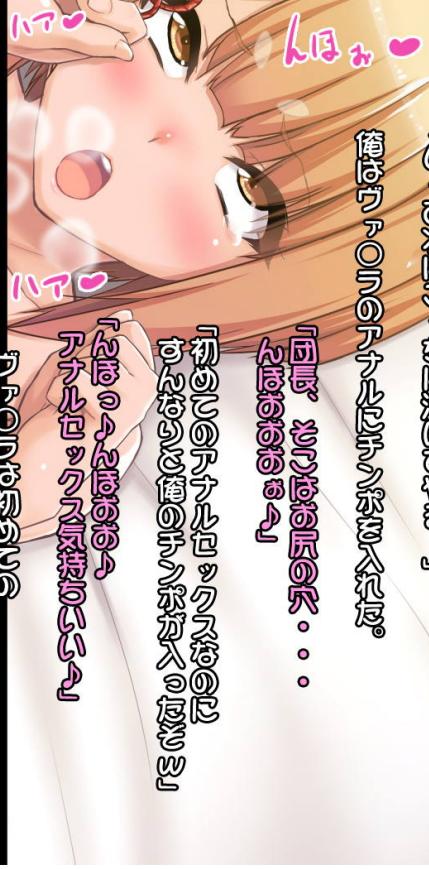
「んほるーんほのあ♪
アナルセックス気持ちい〜♪」

ヴァーラは初めての
アナルセックスで感じてしまっている
足で俺の腰をひきつりと揉みひ
離してくれない。

ガシ... ♥

パ-。-

ドロよ~♥





「ウトロのアナル【気走りの女】アソビ。」
「うわー、出るー！」

俺はウトロの腸内に射精した。

「あん♪団長のオチンンボミルクが
いっぱい入ってましたアヘアヘアヘ」

ウトロの腸内の表情が浮かべられてる。

2時間後

俺は何度もヴァーリの腸内に射精した。

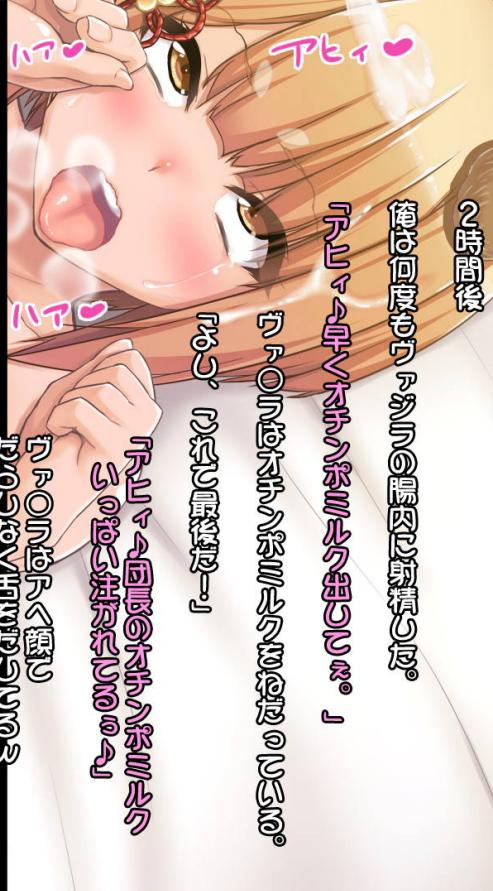
「アヒィ♪早くオチンポミルク出つけ。」

ヴァーリちゃんがオチンポミルクを飲むのが好きだ。

『ふふ、ンボヒ最愛だー。』

「アヒィ♪回長のオチハボミルク
いっぱい注がれてるの。」

ヴァーリがアヘ顔で
だらりと舌をだらりと



「ひれだけ箇の積みじマークシングつたひ
今日からヴァ○ラは箇専用の性処理メス大だる」

「アヒィ~
ハア~
今日から私は団長専用の性処理メス大だる」

「ハア~
アヒィ~
チンポが抜くびホッカシと開いた
アナルがの積みが流れじとだひだ。
『アヒィ~団長のオチンポミルクが
溢れてまひやう』」

「ハ~
ハマ~
ハマ~

「ベ~トリ~

「ハ~
ハ~

「ドロ~
ドロ~

「ボ~カ~
ボ~カ~

「ハ~
ハ~



「ハアハア♪のダメ。。。
ごちゃうる」

オナラと同時に肛門がのたアナルから
精液塗れの極太のんぢ腰を悶がせて絶叫す。

「ハアハア♪ん♪」

ヴァ○リは額を真の赤らめにされながらも、

ヌルヌル
ブゥ～♥
ドロドロ～♥
ベットリ♥
パ～♥

「アヒ~アヒ~アヒ~アヒ~アヒ~アヒ~アヒ~

ヴァ○リが精液塗るの極太一本裏り
凄い苦労でびんびんの汗を出しちゃう。

「クンカクノカム
ヴァ○リの汗を拭いてきてねえな!」

「ハ~ハ~
クガ~クガ~」

「ハ~

アヒ~

アヒ~

ブ~
ブビビ~
ブリリリ~
ブ~
ドロ~

ブエ~ト~

ハ~

「ハアハアエヘ~ヌリヌリヌリヌリヌリヌリ

ハア~アヘ~アヘ~アヘ~アヘ~アヘ~アヘ~アヘ~アヘ~アヘ~アヘ~アヘ~

ハア~

アヘ~

ブエ~ル~

アビビ~

ブリブリブリ~

「ハアハアトアヘ♪
あひつこまじこちゅうる♪
ごもすごく気持ちいいのぉ♪」

「あ～あw脱糞ひながめ
放尿まごひばりあやのたぶん」

「アヘンヴァ○ラはすぐ脱糞いちやうのよつだない
団長専用性処理メス犬ですw
明日からもアナルを駆けて下さいわん♪
びーじゅ♪」

「ひじてヴァ○ラは俺専用性処理メス犬だらうだ。」

「ブエットリ

「ブビビー

「ブリブリブリ

「ハ～
ピース
アヘ～
ハマ～